

単元を貫く言語活動を位置づけた授業づくり

～民話や昔話の紹介を通して～

中村 正雄

国語科の学習において付けたい力を子どもたちに確実に付けるために言語活動の選定が非常に重要である。そうした言語活動を単元全体を通して一貫したものとして位置づけることで国語の能力を育てていくことができる。教師が子どもたち一人一人をみとりながら国語の力をつけ、なおかつ「もっとやってみよう」とさらに追求できるような指導について研究した。

キーワード：民話・昔話 並行読書 三年とうげ 単元を貫く言語活動

1. 研究目的

本校の研究主題「問い続け学び続ける子どもたち」に迫っていけるように子どもたちの考えや発言を一人一人みとりながら学習を進めていく。子どもたちが学習課題に興味を持ち、友だちと意見を交流する中で新しい見方や国語科教材のおもしろさに気づいていけるように単元を貫く言語活動を位置づけることにした。

本研究では、「三年とうげ」を通して民話や昔話の世界を十分に味わえるように指導してきた。子どもたちが見つけた物語のおもしろさを表現し、交流することができればもっと民話や昔話に興味を持ってくれると考えた。

2. 研究方法

本稿では、第三学年国語科「三年とうげ」の実践について記述する。「三年とうげ」は楽しいリズムや季節を表す色彩豊かな表現が特徴的な作品である。この作品に出てくるおじいさんは悲しみや落ち込み、うれしさや楽しさなど人間味あふれる様子が生き生きと描かれている。おじいさんの気持ちの変化やそのきっかけになった魅力ある登場人物も作品のおもしろさであり、子どもにとって親しみやすく、民話や昔話にあるおもしろさを味わうことができる。

2. 1. 付けたい力の明確化

どの教科においてもそうであるが、付けたい力を明確にしておく必要がある。まずは学習指導要領の指導事項に沿いながら子どもたちをみとり、発達段階に応じた指導を設定するのが基本である。本学級のみとりから本単元の学習目標として次のように設定した。

○場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて叙述を基に想像して読むことができる。【C読(1)ウ】

◎文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気づくことができる。【C読(1)オ】

・目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むことができる。【C読(1)カ】

2. 2. 単元を貫く言語活動

単元目標を達成するため言語活動として「民話や昔話を紹介する」ことを単元を貫く言語活動として位置づけた。単元を貫く言語活動とは、当該単元で付けたい国語の能力を確実に子どもたちに身に付けさせるために、子どもたちにとっての課題解決との過程になるよう、言語活動を、単元全体を通して一貫したものとして位置づけるものである。(水戸部 2014) 紹介するという活動を通すことによって民話や昔話により興味を持つことができると考えた。

2. 3. 単元計画

付けたい力を軸にしながら言語活動を考え、「三年とうげ」の単元計画を以下のように設定した。

第1次 単元の見直しを持つ

- ① 「3A お話ミュージアムをつくろう」という学習課題をつかみ、学習計画を立てる。
- ② 三年とうげを読み聞かせし、自分の好きなどころについて交流する。

第2次 三年とうげの学習を通して見つけたおもしろさをお気に入りポイントとして、並行読書している作品についても探していく。

- ③ 登場人物や物語のあらすじをつかむ。
- ④ 物語を音読して、お気に入りの表現について話し合う。(お気に入りポイント 情景・歌)
- ⑤ おじいさんの人物像について話し合う。(お気に入りポイント 人物)

- ⑥ おじいさんの様子や気持ちの変化について話し合う。(お気に入りポイント 人物の変化)

第三次 民話や昔話を紹介するお話ブックをつくり、3Aお話ミュージアムをひらく

- ⑦ ⑧ 登場人物に着目し、民話や昔話のお気に入りポイントを探しながら、お話ブックを作成する。(お気に入りポイント その他)

- ⑨ 3Aお話ミュージアムをひらき、民話や昔話を紹介し、交流する。単元のふりかえりをする。

まず、第一次で民話や昔話に興味・関心を惹き付けるようにする。教材との出会いを工夫することによって今後の学習への意欲を高める。次に、第二次では「三年とうげ」で出てきた好きなどころを交流し、お気に入りポイントとして自分が選んだ民話や昔話の作品についても探していく活動を行った。そして第三次では、探したお気に入りポイントをもとにお話ブックをつくり、3Aお話ミュージアムとして低学年の子に民話や昔話のおもしろさを紹介した。

2. 4. 教材との出会い

子どもたちの民話や昔話に対する興味・関心を刺激し、主体的な活動につなげていくために教材との出会いを工夫していった。

まず、単元に入る前に民話や昔話の本を集め読書コーナーをつくった。このときに「三年とうげ」の学習としてのゴールを意識し、リンクするような民話・昔話を選んだ。「三年とうげ」には「歌のおもしろさ」「色彩豊かな情景」「言い回しや表現のおもしろさ」「魅力あふれる登場人物やその変化」「場面展開のおもしろさ」が表されている。よって上記の観点を含み、なおかつ子どもたちに親しみやすい作品を教師が事前に選んだ。

また、教師が子どもたちに読み聞かせを行った。朝の読書の時間を使いながら民話や昔話を読み進めた。普段民話や昔話を手にとり読むことが少ない子どもたちにとって物語を十分に味わうことができる機会になった。

2. 5. お気に入りポイント

「三年とうげ」の第2時で物語の好きなどころをワークシートに書いた。子どもたちから出てきた「三年とうげ」のおもしろさをお気に入りポイントと名前を付け、並行読書の作品でも探していった。このときに単元を貫く言語活動として「三年とうげで見つけた観点のおもしろさ」が「自分が選んだ本で見つけたおもしろさ」とリンクするようにした。つまり「三年とうげ」でのおじいさんについておもしろさを見つけたら並行読書した本においても登場人物におけるおもしろさ(お気に入りポイント)を見つけるようにした。そうすることによって学習している

教材同士につながりが生まれ共通点を見つけ出しながら学習を進めることができると考えた。

3 学習の流れ

3. 1. 単元のはじめ

三年とうげを学習するにあたって民話や昔話の意味をおさえ、昔から語り継がれている話であることを全員で確認した。そして、民話や昔話に興味を持ってもらえるようにDVDを使って一休さんを視聴した。「一休さんかっこいい」「なるほど。こんな方法があるんだなあ」などと一休さんの知恵に感心する子どもが出てきた。また、みんなが知っていそうな物語を取り上げて昔話クイズを行った。民話や昔話との出会いを工夫することによって、子どもから「もっと読んでみたい」「本を紹介したい」という声が出た。

学習の課題を「3Aお話ミュージアムをつくろう」と設定し、自分が好きなお気に入りポイントを使って物語を紹介するようにした。子どもたちは、課題を設定した後、自分の紹介したい本を真剣に選んでいた。



図1 並行読書する本を決定する

3. 2. お気に入りポイントの設定

教師が「三年とうげ」を読み語りし、「好きだなあ」と思ったところを話し合った。子どもたちは、ワークシートに好きだと思ったところを書いて友だちと交流した。三年とうげの美しい情景や「えいやら えいやら えいやらや」といった歌のリズムに注目する子もいた。おじいさんが何回も転ぶ歌のところでは、「おじいさん楽しそう」「リズムがとってもいい」「一体誰が歌っているんだろう」という感想が出てきた。また、おじいさんやトルトリなどの人物に注目する子どもたちもいた。中には「おじいさんが困ったところがおもしろい」「おじいさんの顔がおもしろい」「トルトリってかっこいいなあ」「おじいさん、あんなに困っていたのにまた転がっているなあ」と人物やその変化についての意見が一番

多く出た。

子どもたちから出た「三年とうげ」の好きなところから情景や歌、人物、人物の変化という意見を取り上げてお気に入りポイントの観点として、今後授業を行うことを子どもたちと確認した。

3. 3. 三年とうげとお気に入りポイント

第4時では、「三年とうげ」の情景描写や言い伝えについて学習した。読み語りした際の好きなところで「美しい景色がすき」という意見があったので子どもたちにもその情景をイメージしてもらおうとススキやカエデを実際に用意し、子どもたちに秋の植物を感じられるようにした。その後のお気に入りポイント探しでは、自分が選んだ本の風景や歌などのリズムがよいところで気に入ったところを探し付箋を貼った。

第5時では、一番多く意見が出た人物について学習を行った。まず、おじいさんの様子が分かるところを教科書から抜き出していく活動をした。子どもたちからはおじいさんの様子から「あんなに気をつけていたのに三年とうげで転ぶなんて・・・」といった意見が出てきた。また、グループ活動を通しておじいさんの人物像にせまった。話し合いの中でおじいさんのことをおっちょこちょいな人物と感じる子がいる一方、素直な人物ではないかと考える児童もいた。

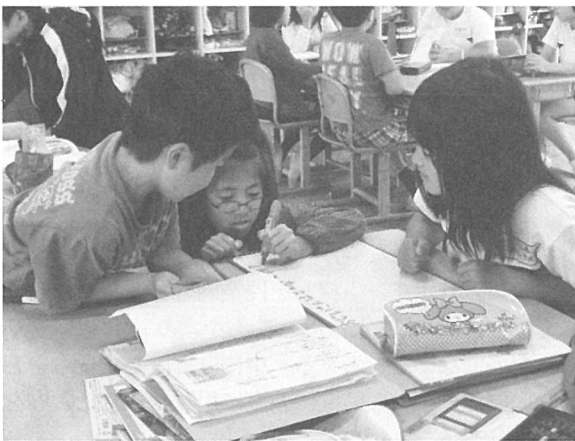


図2 おじいさんの人物像を考える

授業の後半では、人物についてのお気に入りポイントを探し、付箋を貼った。観点ごとに見やすいように前回とは違う色の付箋を使うようにした。「三年とうげ」で学習した観点を違う作品についても探すことで学習活動間の関係性を高め、物語のおもしろさを味わえるようにした。展開がおもしろいだけでなく、民話や昔話の情景や登場人物などの観点を子どもたちに提示することで、新しいおもしろさの発見に繋がると考えた。

3. 4. 登場人物の気持ちの変化をとらえる

民話や昔話以外にも物語では登場人物に気持ちの変化が起こる。そこにおもしろさを見いだした子どもがいた。第6時では登場人物の気持ちの変化に迫っていた。

教師：おじいさんの心が動いたところはどこかな。
けんと：おじいさんが転ぶところ。最初転ばないと思っていたけど、後から気づいて長生きすると思った。
みゆき：つけたしです。おじいさんが転んで病気になった。
みずき：病気になったっけ。
りょうへい：ご飯食べなかったから病気になった。
さき：そうだけど。三年とうげでこけて食べなくなったから三年とうげが理由
あいみ：三年とうげでこけたとき、おじいさんの頭の中は生きられないと思っていた。
さやか：私もおじいさんの転ぶところ。おじいさんが転んだ後、がたがたふるえている。また、最後には転けてもニコニコしていてすっかりうれしくなったと書いているから心が動いているのかな。

子どもたちが登場人物の心情の変化に注目している場面である。「がたがたふるえている」などと文章の叙述にもとづいているのがわかる。この後、トルトリがおじいさんに影響を与えたという意見からさらに話し合いを進めていった。

4. 授業の考察

第6時の後の協議会では、教師側と子ども側のズレがあったという意見があった。本時案では「どこでおじいさんの心が動いたのか話し合おう」というめあてで展開していたものの、教師の発問が「どのように変わったのか」という変化の内容に言及してしまい、大きなズレになってしまった。教師側の発問がめあてに沿った発問になるようにもっと吟味していく必要があった。また、第5時のところでおじいさんの気持ちの変化が出てきているので、人物像をもっと簡潔にとどめておくことができれば、第6時でもっと活発な意見の交流ができたのではないかと意見もあった。つまり、同じような内容になっているところもあったのではないかと反省している。

その反面、子どもたちは今まで学習した学びの足跡（既習事項を掲示した物）を使いながら考えることができていた。子どもたちの「言いたい」という気持ちを教師がみとりながら適切に返していくことがもっと必要であると感じた。

第9時では、実際に低学年の子に民話や昔話のおもしろさを紹介した。紹介文と物語の本を置いておくことで、低学年の子も興味が出た物を手にとって読むことができた。中には3年生が民話や昔話のおもしろさを伝えている場面もあった。



図3 民話や昔話のおもしろさを伝える

3A お話ミュージアムを開き、低学年の子に民話や昔話を紹介した後のアンケートの結果である。

○今回の学習を通して、民話や昔話に関して当てはまる番号に1つ○をつけましょう。

- ①とても興味を持った・・・10人
- ②興味を持った・・・16人
- ③あまり興味を持たなかった・0人
- ④全然興味を持たなかった・・・0人

○民話や昔話の本をもっと読みたいと思いますか。

- ①とても思う・・・14人
- ②思う・・・10人
- ③あまり思わない・・・2人
- ④思わない・・・0人

○3A お話ミュージアムで読みたい本がありましたか。

- ①ある・・・24人
- ②ない・・・2人

○あると答えた人にききます。なぜ読みたいとおもいましたか。

- ①興味がわいた・・・10人
- ②おもしろいと感じた・・・10人
- ③お気に入りポイントをさがしたいと思った・・・3人

私が書いたお話ブックを2年生が読んでくれて「また読みたい」と言ってくれたので嬉しかった。(りこ)
違う昔話を読みたくなったし、昔話はおもしろいと思いました。(さとし)

「読みたかった本ありますか。」で自分のお話ブックがでてきたからうれしかった。(ひろし)

わたしは三年とうげをやるまでは民話や昔話にあまり興味がなくて、お話ブックや三年とうげをやっておもしろいところがわかって興味を持ちました。(えみり)

5. 成果と課題

本研究の課題としては以下の点がある。まず「情景」について学習し、自分の好きな情景に付箋を貼っていた点である。並行読書した本の中に付箋を貼っていくのだが、好きな情景描写をさがすのではなく、単に見つけた情景描写に貼っている児童もいた。見つけた情景の中から次は自分のお気に入りを決める時間を設定するなどの支援を行うことが必要である。また、民話や昔話のおもしろさを伝えるための活動であるということをもっとおさえておくことで目的意識を焦点化させることができる。

次に民話や昔話の紹介する活動についてである。子どもたちは低学年の子に民話や昔話のおもしろさを知ってほしいと考え、紹介することにした。しかし、見つけたお気に入りポイントをもとに紹介文を書いたお話ブックは第3学年の内容であり、低学年には難しかった。指導の内容と低学年対象の紹介活動がぴったりとかみ合わなかったところもあり、低学年を意識した紹介活動も必要だと感じた。また、紹介するお話ブックを作るだけでなく、一人一人が役割を持って紹介をできるような取り組みが必要であった。相手意識を持たせ活動することにより、自分が見つけた民話や昔話のおもしろさが伝わったときのうれしさや達成感を味わえるようにできていればと後悔している。

成果としては、授業後のアンケートで全員が民話や昔話に「とても興味を持った」「興味を持った」と回答していたことである。民話や昔話の本を読みたいと「あまり思わない」と回答した児童も、教室内の本を読み切ってしまったという意見であった。「三年とうげ」で見つけたおもしろさを違う本でも見つけ、紹介することができたのではないかと感じた。また、紹介するためのお気に入りポイント探しを授業内容とリンクさせることで、物語の気に入ったところをより紹介しやすくなったのではないかと考える。中には普段あまり本を読まない児童が読書の時間に教室に用意した昔話の本を手に取り、読んでいたこともあった。

口承文化として今日まで伝えられている民話や昔話はやはり物語のリズムや表現、展開などおもしろさがあるからこそである。子どもたちの感想からは民話や昔話のおもしろさを感じる部分があった。子どもたちの感じたことをこれからも生かしながら授業を進めていきたい。

参考文献

- 河合隼雄(1982) 昔話と日本人の心 岩波書店
- 水戸部修治(2014) 小学校国語科学習指導案パーフェクトガイド3・4年 明治図書
- 水戸部修治・浮田真弓・細川太輔(2015) 単元を貫く学習課題と言語活動 東洋出版社